

編集後記

- ・2011年3月の東日本大震災から1年8ヶ月余りが経過した。この間、いろいろな立場や関係において、災害実態の把握とこれからの復興の方向性などが、繰り返し議論され、さまざまな運動が展開してきた。日本遺跡学会においても、この未曾有の大災害における文化遺産の被災状況を確認するとともに、さまざまな災害と地域との関係にも視野を広げ、地域の復興において文化遺産あるいはその保護が如何なる意義と役割を有し、また、将来に向けて私たちはどのように行動すべきかを考えるために、本号に特集2「災害／文化遺産／地域」を企画した。このようなテーマについては、「遺跡学」の中心的課題のひとつとして引き続き検証・考察・行動に付すべきものとして、ここに強調しておきたい。
- ・この秋、ニューヨークに滞在する機会を得たので、世界文化遺産「自由の女神像」(Statue of Liberty)を訪れることとした。1番の地下鉄でマンハッタン島最南端のSouth Ferryまで行き、Battery ParkにあるCastle Clinton National Monumentで「自由の女神像」が立つLiberty Islandへのチケットを買った。前日までの秋晴れとは裏腹に、曇天に時折雨がパラつく生憎の天気であったが、まあ、その土地勘を自らの身に感じておくのは重要なことだろうと、些か意気込んでいた。しかし、重ねて生憎であったのは、昨年125歳を迎えた女神像が台座部分の改修工事中で、袂のぐりりから眺めるに止まらざるを得なかったことである。2周したところで早々に諦めてBattery Parkへ戻ることにしたが、フェリーはかつて入国管理局のあったElis Islandに寄稿し、乗船客を吐き出した。いつものことで下調べなどしていなかったが、むしろ、見るべきはここにこそあったのである。Elis Islandの入国管理局は、1892～1954年に運用された後は放置され、荒廃が際立って建物が取り壊される段になってはじめて保存されることとなり、アメリカ国民の重要な原点のひとつであるこの島は1965年にNational Monumentとなった。1980年代には修復工事が行われ、現在は、Liberty Islandとともにアメリカ国立公園局(National Park Service)が管理・公開している。平日ではあったが、写真パネルと音声ガイドを主力とする展示に、たくさんの人々が熱心に見入っていた。さまざまな困難を乗り越えていったアメリカ移民の具体的な物語や証言を基調としていて、そこには、来訪者を深く引き込ませる種々の工夫が強烈に感じられた。国家や民族のそれぞれに、歴史・文化のメルクマールとなる遺跡とその理解の在り方があることを改めて認識したところで、Liberty Islandでのガッカリ感も払拭されて、なお、お釣りが来るほどに感動した。(T.H)
- ・第9号では、平成23年度大会(福井)報告である「発掘庭園 - 空間と技術 -」(特集1)と誌上構成の「災害／文化遺産／地域」(特集2)の2つの特集企画を設けた。
- ・特集1「発掘庭園 - 空間と技術 -」は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館と文化財庭園保存技術者協議会との共催で、福井県福井市の福井県立歴史博物館講堂において、文化財庭園保存技術者協議会の第8回文化財庭園フォーラムと合同で開催された平成23年度大会(福井)の、第1日(平成23年11月26日)における3つの講演とパネル・ディスカッション(1)[座長:亀山章]の記録、第2日(平成23年11月27日)における5つの事例報告、そして、パネル・ディスカッション(2)[座長:小野健吉]の記録と座長の論考を掲載した。この特集企画については、学会誌編集委員の青木達司が、本学会副会長の吉岡泰英(一乗谷朝倉氏遺跡資料館長)と協議を重ね、大会運営から本誌掲載までを担当した。
- ・特集2「災害／文化遺産／地域」は、学会誌編集委員の平澤毅が企画素案を検討し、元に各方面との相談の上、さまざまに協力を得ながら担当したものであり、冒頭の特集趣旨については、学会誌編集委員の増淵徹が執筆した。昨年からの企画準備において本誌編集委員のほか、関係各方面に打診・相談の結果、17編をご寄稿いただくことができた。
- ・投稿を募集した「研究論文」と「研究ノート」については、それぞれの投稿の主題に専門の査読者による校閲及び編集委員による修正等の適否の確認を経て、「研究ノート」1本につき掲載を決定した。
- ・「冒頭グラビア」及び「遺跡の現場から」は、遺跡をはじめとするそれぞれの立場から様々な情報等を発信するものとして、「遺跡の現場から」には6本のご寄稿をいただいた。依頼に際しては、特に上記特集との関連に重点を置いた。
- ・「学界・行政情報」は、遺跡学に広く関連する学界及び行政の情報として、4本の記事をご寄稿いただいた。
- ・加えて、今日、日本遺跡学会誌『遺跡学研究』が、本学会員以外にも普及しつつあることを踏まえ、また、会員諸氏におかれても、本誌上で参照できるように、平成23年度から、「入会のご案内」として、「日本遺跡学会設立趣意書」と「日本遺跡学会会則」、そして、設立総会以来の大会等の開催実績を掲載することとした。
- ・表紙のデザイン／構成には中村一郎氏(奈良文化財研究所)のご協力を得た。
- ・本誌の編集・校正等の総括については、平澤毅・青木達司・菊地淑人が担当し、各編集委員と連絡・協議の上、事務局の運営に関連して北野陽子・芦高典代・渡辺佳奈・前原京子の各氏に諸作業・事務連絡等の協力を得た。

本誌の構成・編集については、編集委員が幹事会及び運営委員会において各種企画の検討状況などを随時報告し、協議を行った結果を踏まえて進めた。関係各位には多大なご理解とご協力を賜ったこと、厚く御礼申し上げる次第である。

学会誌編集委員 青木達司・栗野 隆・菊地淑人・坂井秀弥・平澤 毅・増淵 徹(五十音順)

遺跡学研究 第9号 2012

発行日 2012年11月20日
発行者 日本遺跡学会
〒630-8577 奈良県奈良市二条町2-9-1
奈良文化財研究所 文化遺産部 景観研究室内
TEL 0743-30-6816 FAX 0742-30-6815
E-mail iseki-g@nabunken.go.jp
印刷所 能登印刷株式会社
